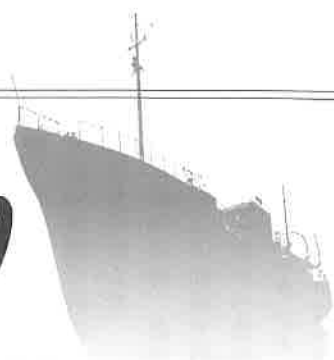


2017.01.01
No.397
(1・2月号)

福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



日曜集會に集まった子どもたち。帰島して約1年後のエニウエトク本島の教会前で（エニウエトク環礁・1981）。撮影者の島田興生さんによる連載が今号より始まりま（2めん）。



第五福竜丸70年に

核なき世界への航海を

公益財団法人第五福竜丸平和協会代表理事 川崎昭一郎

明けましておめでとうござ
います。

二〇一七年は、第五福竜丸
が建造されて七〇周年に当た
ります。

公益財団法人第五福竜丸平
和協会が東京都より受託管理
している都立第五福竜丸展示
館は本年開館四年を迎えま
すが、この間の通算来館者数
は五三〇万人に達し、とりわ
け小中学生、高校生などによ
る社会科学見学や修学旅行は一
万六〇〇〇校、一二七万人に
のぼります。

半世紀前に夢の島に打ち捨
てられた第五福竜丸を遺し、
原水爆の被害を後世に伝えよ
う、核兵器のない世界を実現
しようとの市民の願いと運動
を受けとめた東京都により第
五福竜丸展示館は建てられま
した。

展示館は現在、施設の改修

や船体の補修など、さまざま
な課題に直面し、また被ばく
から六三年を経て第五福竜丸
の被災、水爆実験の被害を今
日的な問題として伝えていく
使命など、第五福竜丸平和協
会の役割はますます重要にな
っていると考えます。

私どもは小規模な公益財団
ではございますが、船を守つ
た人々の願いを次代に引き継
ぎ、第五福竜丸の船体をと
して平和な世界への願いを
伝えていきたいと考えますの
で、第五福竜丸につながる皆
様方の変わらぬご協力を賜り
たいと存じます。

私どもの開催する講座、メ
モリアルイヤー関連行事等へ
の積極的なご参加をお願い
いたします。

新年が皆様お一人おひとり
にとって良い年でありますよ
う、心から祈念いたします。

語りつぐ
ビキニマーシャルの人びととの40年
島田 興生① 沖繩出身の牧師
具志忠太郎さん

「一緒にビキニに行かないか」。隣に座る前田哲男さんが先ほど言った言葉を私は何度も噛みしめていた。一九七四年六月三日、東京新宿・歌舞伎町ゴールデン街の一角の飲み屋でのこと。アルコールが少しまわった私の頭に、熱線で焼けただれたビキニ島の岩山や爆風で破壊された島の風景が浮かんだ。

この年の春、前田さんはニユーギニア島民で編成され戦死した「ポナペ決死隊」の取材に、(現ミクロネシア連邦)ポナペ島を訪ねた。そこで、

東方九五〇キロにあるマーシャル諸島の米国の核実験場・ビキニ環礁に元島民が帰島させられているという情報を聞き込んだ。

七〇年頃から私は広島、長崎に通い始め、原発被ばく者などの取材も始めていたので、核に関する大まかな知識は持っていた。しかし、前田さんが話した「ビキニのその後」は、私の想像をはるかに越えるものだったが、それだけに誘いを断れない魅力があった。

約一カ月後の七月九日午後五時、私たちはマーシャル諸島の中心地マジュロ島の空港に降り立った。タラップに出ると、湿気を含んだ生暖かい潮風が身を包み、これから関わるビキニへの興味がいや増して行くのを感じた。

空港から細長い島幅の一本道を車で二〇分走ると、政府などの官庁、教会、病院、学校や民家などが無秩序に軒を並べるダウンタウン。DUD地区に着いた。当時の人口は約七五〇〇人。

倉庫の二階を改造した安ホテルに旅装を解いた私たちは

まず船便を調べに、港の運輸事務所に行った。係官は「ビキニには、多分来週出港します」と言ったが、船のクルーや島民は、「いつ出るかわからない」と信じていなかった。

その間、私たちはある日本人を探した。沖繩県今帰仁村出身の具志忠太郎さん(写真)。一八歳の時、高瀬貝の会社に働くため、「旧南洋群島マーシャル支庁」に渡ってきた。敗戦後、全ての日本人が引揚させられた中、唯一残留を認められた日本人で、戦後はプロテスタント教会の牧師になった。

リタ地区にある無線局の向かいの具志さんの家を訪ねた。具志さんは、褐色の肌、引き締まった体つき、若々しいエネルギーが溢れる話し方、とても六二歳の聖職者には見

えなかった。

五四年三月のビキニ水爆実験で被ばくしたウトリック環礁に七三年一月から七四年五月までの約半年間、自ら志願して赴任し、知られていなかったウトリック島の被ばく実態を初めて明るみに出した人だ。「土地の害毒なのか、ヤシの木やパンの木に潜む毒のせいか、島民はいつも下痢ばかり。被ばくした一五七人のうち、たくさんの方が死んだ。のどの部分(甲状腺)に障害がある者も多い。年二回来る米国の医師団は調べるだけで、治療を全くしないので、彼らが島民を使って人体実験していると確信した」などと二カ月に一度しか船便が通わない、閉ざされた島の住民の不安や苦しみを伝えてくれた。

私たちは、七月一七日、具志さんと別れ、ようやくマジュロを出港した巡航船にのり、ビキニに向かった。

この二年後の七六年七月、私は再びマジュロを訪れた。具志さんは、私たちがマジュロを去った年の一〇月からウトリック島に戻り、七五年の

七月まで滞在し、島民の心を見守り続けた。しかし、体調を崩し、マジュロの病院に入院していた。

ベッドの上の具志さんは、痩せて骨ばかりになり、二年前の面影はまるでなかった。しかし、寝返りをうち、咳こみながら、何時間も語り続けた。話はビキニやロンゲラップ、ウトリック島の事だけでなく、クワジエリン米軍基地、若者の自殺、さらに、カヌーの航海や漂流談、マーシャルの昔話や怪談まで及んだ。

具志さんは、七七年六月、多くのマーシャル人に惜しまれつつ六五歳の波乱に満ちた生涯を終えた。具志さんとマーシャル人妻との間にはシゲル、ヨシコなどの日本名が付けられた七人の子どもがいる。彼らはいまマーシャルの各界で活躍している。

*

はまだ こうせい フォト・ジャーナリスト(一九三九年サハリン生まれ)。写真集『ビキニ―マーシャル人被曝者の証言』(JPU出版)、『還らざる楽園』(小学館)、『ふるさと』(ポイズンの島)ほか。展示館での写真展「マーシャルはいま、故郷への道」など3度開催。

2017 核なき世界への旅が始まる

田巻 一彦

核の「非人道性」を 糾弾する最初の文書

〔略〕而して、今や新奇にして、かつ従来のいかなる兵器、投射物にも比し得ざる無差別性惨虐性を有する本件爆弾を使用せるは人類文化に対するあらたなる罪状なり。帝國政府は自らの名においてかつまた全人類及び文明の名において米國政府を糾弾すると共に即時かかる非人道兵器の使用を放棄すべきことを嚴重に要求す。〕

一九四五年八月一日、日本帝國政府が米國に送った広島への原爆投下に対する抗議文はこのように締めくくられる。

アジア各地で非人道的暴虐の限りを尽くした帝國政府の言葉であることを率直に受け入れるに抵抗なしとはいえない。だが、この抗議文

が核兵器の非人道性を糾弾する最初の公文書であったことを覚えておきたい。

四五年八月一日五日もって生まれ変わったはずの日本。しかし、待ち受けていた冷戦の中で、世界は「核の非人道性」を「安全保障」という命題によって封じこめ、あるいは後景に押しやってしまった。

核廃絶議論の パラダイムが変わった

二〇一〇年四月二〇日、赤十字国際委員会のヤコブ・ケレンベルガー総裁（当時）はジュネーブで行った演説の中で次のように語った。「核兵器をめぐる議論は軍事ドクトリンやパワーポリティックスのみに基づくものであってはならないと強く確信します」。「核兵器使用の防止には、法的拘束力を持つ国際条約によ

って核兵器を禁止し完全廃棄することを目標とした交渉を追求するという、現存する義務の完遂が不可欠です」。

この演説が大きな転換点となって、核兵器を巡る議論のパラダイムは変わった。一三年から一四年には「核兵器の人的影響」に関する政府主催の国際会議が三回（オスロ、ナヤリット、ウィーン）にわたって開催された。ウィーン会議で発表された「オーストリア誓約」（後に「人道誓約」と改題）は次のように言う。「すべてのNPT加盟国に対し、（略）核兵器の禁止及び廃棄に向けた法的なギャップを埋めるための効果的な諸措置を特定し、追求するよう求める。」

あらわになった 日本の後進性

このような国際的潮流の広がりや深化によって露になったのが、日本の後進性であった。安倍首相は国会で、「人道誓約」（当時「オーストリア誓約」）を「いたずらに核保有国との関係に溝をつくって、立派なことはいっている



2015年4月NPT再検討会議
ニューヨーク行動参加の被爆者

んですけれども一歩も実は理想に近づいていくことにはならない」アプローチだといって憚らなかつた。（一五年三月一日・衆院予算委員会）。事実、国連会議などで日本代表が繰り返したのには、核兵器の非人道性と厳しい安全保障環境の両方の認識にたつた。「核兵器国と非核兵器国の協力による具体的・実践的措置」が必要で、核兵器を禁止する新しい法的文書の議論は必要ないという主張だった。

禁止条約の交渉、 三月に始まる

しかし、国連加盟国の多数が下した判断は日本政府の主張とは異なるものだった。二〇一六年の国連総会第七一会期で採択された決議「多国間軍縮交渉を前進させる」

は、「核兵器を禁止し、それらの全面的廃棄に導く法的拘束力のある文書を交渉する会議」を、一七年に開催することを決めた。会議は三月末にニューヨークで始まる。

もちろん会議の目標は達成の容易なものではない。「核兵器を禁止する条約」の具体的内容で国際社会の多数が共有するものは未だ存在しない。いくつかの提案を参考に、あるいは必ずしもそれらにとらわれずに、私たちは白いキヤンバスに画を描いてゆかねばならない。

国連総会の「多国間軍縮交渉」決議に、日本は、核兵器国や核兵器に依存する国々の多くとともに反対した。一瞬にして荒野に変わり果てた広島、長崎に付んで、「非人道兵器」への憎悪をかみ締めていた四五年八月から、我々はこんなに遠くまで来てしまった。

二〇一七年を、日本と日本人が、未来へのビジョンをもって、見失った原点へと帰する旅の始まりにしたいものだ（たまき かずひこ/NPO法人ピースデポ代表）。

第五福竜丸の故郷 「焼津」を訪ねて 町井 広子

一月二三日、福竜丸は大勢の人たちに見送られ、二三名の乗組員を載せてこの港を出発し、二カ月後の三月一四日、不安と体の不調を抱えた乗組員を乗せてこの港に帰ってきました。

浜当目を歩く

一月一日「第五福竜丸ボランティアの会」は、焼津市に研修旅行に行きました。ボランティア一〇名が参加しました。朝、東京駅を出発した時は土砂降りの雨でしたが、焼津についた時には薄日が差してきました。

焼津駅からは、元教員で静岡で平和活動をされている成瀬實さんと粕谷たか子さんが車で案内してくれました。

焼津港

最初に、旧焼津港を見学しました。港から新雪を頂いて白く輝く富士山が見えます。福竜丸が出発した岸壁と帰港した岸壁、事件報道の後係留されていた場所などを解説してもらいました。六二年前の

一月二三日、福竜丸は大勢の人たちに見送られ、二三名の乗組員を載せてこの港を出発し、二カ月後の三月一四日、不安と体の不調を抱えた乗組員を乗せてこの港に帰ってきました。

次に、浜当目の弘徳院にある久保山愛吉さんのお墓にお参りしました。長い急な石段の上にある、船のような、原子雲のような不思議な形の墓石です。脇には広島の花である夾竹桃と長崎の花の紫陽花が植えられています。「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい。」という久保山さんの言葉を思い起こしました。

隣の那閉神社は平安時代からの古社で海の安全を祈願する神社です。また浜当日海岸に面した久保山愛吉さん、すずさん夫妻の眠る久保山家のお墓にもお参りしました。ここには愛吉さんのお骨が分骨されています。目の前に駿河湾が広がる美しい場所です。この日は波が荒く、群青色の海がきらきら輝いていました。

池田正穂さんのお話

地元で人気の食堂で昼食後、焼津歴史民俗資料館を見学しました。漁具などの資料が並び、その一角には第五福竜丸コーナーがあり、事件に関する市の資料や福竜丸の模型などが展示されています。

元乗組員・池田正穂さんも駆けつけて展示されている漁具の使い方や当時の様子などを説明してくれました。八三歳とはとても見えない若々しい印象です。一二年前に脳梗塞になり、言葉に少し不自由があり、最近耳が少し遠くなって小さい声など聞き取りにくいというところで、高校生たちと池田さんにインタビューを続けてきた粕谷さんが、サ



久保山愛吉さんの墓前

ポートしてくれました。資料館の展示の中で、乗組員が静岡から東京に運ばれる際に担架に乗せられて飛行機に乗り込む写真は、初めて見るもので印象に残りました。

この後、近くの豊田公民館の会議室に場所を変え、池田さんのお話を聞きました。

*

■西の空が真赤に染まり、呆然としていたとき漁労長が揚げ縄を命じたので、自分は慌てて船内に飛び込んだ。その瞬間、海の底からすごい轟音がした。

■揚げ縄のときには甲板にいて手でロープを手繰っていた。ロープで手が擦れて皮が向けたけれど、そのまま続けた。

■体についた灰は、機関の冷却水でさっと洗い落とした。他の乗組員も帰港するまでに海水で二、三回体を洗ったが、髪の毛の灰がなかなか落ちなかった。

■東京の病院に入院していたときは、割と元気でみんなに届いた手紙を配ったりしていた。

■退院後、あんこ屋をしていた。

た実家に戻ったが、そのあんこを買った客が近くの川に捨てているのを見たときはつらかった。

■焼津については結婚もできないし、仕事もままならないので京都に行った。一〇年ほどして焼津に戻り、長距離トラックの仕事を定年まで続けた。

などなど、体験したことを詳しく話してくれました。分かりやすい話し方で、その時々様子が想像できました。

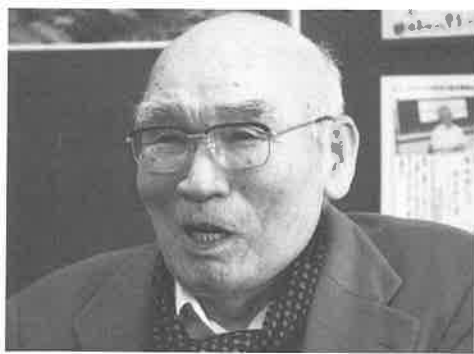
いつまでもお元気で、子どもたちに体験を伝えてください、と願いました。

研修を終えて

実際に焼津の地を歩き、福竜丸縁の場所を訪ね、池田さんから当時の話をお聞きし、「ここは福竜丸の故郷なのだ」と実感できました。また、私たちのために一日ガイドをし車も運転してくださいった成瀬さん、粕谷さんからは平和活動の熱意を学びました、本当にありがとうございました。

(まちいひろこ／展示館ボランティア)

元乗組員 池田正穂さんに聞く



元乗組員の池田正穂さん

第五福竜丸展示館ボランティアの会焼津研修で、元乗組員の池田正穂さん（八三）にお会いし、当時の様子やこんにちの気持ちを伺うことができました。（編集部）

池田さんは被ばく六〇年の二〇一四年に島田市の小学校

に呼ばれ体験を語ったことをきっかけに、学校や市民団体などから要望され自身の被ば

くについて語り始めました。

今回も、ボランティアの会の依頼を快く引き受けてくださり、日ごろ来館者に対して展示の解説を行うボランティアの皆さんからの質問にユ一モアを交えながら丁寧に答えていました。

焼津の漁師に

焼津出身の池田さんは尋常高等小学校を卒業後、一四歳で漁師になりました。カツオ船やサバ船を経て、二一歳で機関士として第五福竜丸に乗船しました。当時の焼津には仕事といっても漁師になるかタバコ屋の店員になるか、または両親の営むあんこ屋で働くかの選択肢しかなく、魚が好きだったこともあり漁師になることを選んだといいます。

第五福竜丸には、漁労長の見崎吉男さんと親戚関係にあ

ったことから声をかけられ、乗船することになりました。

被ばくの航海

「太陽が上るぞォー」
「馬鹿野郎、西から太陽が上がるカッ!!」

印象的な書き出しで始まる池田さんの入院中の手記が「文芸春秋」（五四年九月号）に掲載されています。文中には水爆実験に遭遇した衝撃や不誠実な対応を取る米国に対する不信、両親や周囲の愛情に対する感謝の念などがつづられていきます。

閃光の瞬間、船内にいた池田さんは船員の驚きの叫び声を聞いて甲板に飛び出しました。直ちに揚げ縄を開始するため機関室に飛び込むと、爆発音が海の底から響くように聞こえたといいます。航行中、機関士はエンジンが積まれた機関室での仕事ですが、揚げ縄作業は船員総出で行うため池田さんも作業中に死の灰を浴びました。

池田さんの話からは、乗組員ごとに活動場所や船室が異なるため、被ばくの状況にも差があることが見えてきまし

た。機関室は閉鎖的な空間のため、閉じ込められた放射性物質が高濃度になっていたようです。一方で過熱したエンジンの冷却に使用した海水を排出せずシャワーのように使

い体を洗っていたという特有の習慣も、被ばくの程度に影響していると思われます。また体調についても、自身の体調の変化には気づいていても船員それぞれの下痢や脱毛などの具合は知らなかったと、船内の乗組員たちの距離感を教えてくれました。

心無い差別

帰港後、乗組員たちは東京の病院で入院生活を送ります。全国からお見舞いや励ましの手紙が送られ、比較的病状が良好だった池田さんはそれらを乗組員に配って回ったそうです。

しかし、世間から寄せられる視線は温かいものばかりではなく、心無い差別も乗組員を苦しめました。池田さんは入院中、テレビで「福竜丸の人とは結婚したくありません」とインタビューに答える女性を見て、ショックを受け

ました。当時、平均年齢二五歳の乗組員たちのほとんどは未婚です。こうした視線が乗組員たちの心をいかに傷つけたかは想像に難くありません。

また、実家のあんこ屋も池田さんが死の灰を浴びたという理由から敬遠され店を閉めたと言います。米国から支払われた見舞金の一部は、そのための補填として使ったとも話してくれました。

絶たれた将来

池田さんはその後、京都の工場に一〇年ほど勤務しました。漁師に戻りたいという思いはなく、焼津に帰ってからトラック運転手として働きました。もし、被ばくしていなければ、どんな仕事をしていたかとの質問にはつきり「漁師だな」と答え、被ばくにより将来を絶たれた悔しさが滲むように思えました。

「当時の機関は船に残っているか？」と尋ねられ、かつて自分で手入れをし動かした機械類を懐かしむように「機関室にいっぺん行きたいな」と笑いました。

連載④ 最終回

晴れた日に
雨の日に

山村茂雄



第五福竜丸は建造七〇年を迎え、展示館で昨年一月から「この船を知ろう、第五福竜丸建造七〇年の航跡」特別展が開かれています。

第五福竜丸がアメリカの水爆実験被災の「証人」として保存された大切な役割は言うまでもありませんが、木造船としての「漁船第五福竜丸」の保存は貴重なものです。日本

の漁業を知ろうえでまた、木造船の技術、船大工の仕事を語り継ぐことにとっても多くの「財産」を残しています。

*

「晴れた日に雨の日に」の連載を始めたとき、最初は広田重道さんの「短靴と夢の島」の逸話を紹介しましたが、結びは嶋田徹之助さんの「自転車と竹箒」と思っていました。連載が思いのほかにつづき嶋田さんの紹介が遅れました。

深川木場の筏師だった嶋田さんが、保存運動初期の「江東三羽鳥」三井周さんの紹介で夢の島に通うようになるのは、第五福竜丸の保存位置が確定し、見張りの番小屋もできた一九七一年から七二年にかけてのころでした。それから、展示館開館まで五年を超えて嶋田さんは「自宅の東陽三丁目から自転車毎日やってきて船の監視をつづけ」たのです（広田重道「第五福竜丸保存運動史」）。

*

通う嶋田さんの自転車の荷台には、雑巾・ブラシ、台所箒などがくくり付けられていました。埋立て工事現場から

水を運んで清掃、船体の見回り、甲板や周囲を掃くのは竹箒です。写真の「船を美しくするつどい」で竹箒を肩にかけているのが嶋田さんです。

私は朝早く夢の島に行ったことはありませんでしたが、展示館の鉄骨組立てが始まったころ、鉄骨の前に立つ嶋田さんの立ち姿は、笠を被れば広重描く「深川木場」の筏師と見まがうほど「様に」なっていました。

謡曲「高砂」に「立ち寄る影の朝夕に搔けども落葉の尽させぬは」と尉(翁)が竹柁(さらへ)を使う場面があります。姥とともに「相生」の長寿を謡う尉(翁)の竹柁に、嶋田さんの竹箒が重なりました。

こんなジョークがありました。「竹箒が高速道路を造る」と言うもの。高速道路の工事現場、残土や盛り土を運ぶダンプカーが路上に落とす土塊をいち早く処理するために待ち構える清掃員の、みんなが持つ竹箒のジョークです。

不遜のそしりを承知で記せば、嶋田さんの「竹箒」は、荒涼たる夢の島を、ともに生きる第五福竜丸のこれからの

道筋を先導する穂先と見えたのでした。

*

第五福竜丸が夢の島で「発見」された直後から三井さんをはじめ船の監視、応急処置のために、地元江東の大江さんや建具職のみなさんや区内で働く人たちが作業に当たったのでした。

船名を「はやぶさ丸」から「第五福竜丸」に刻銘するのは七〇年二月、刻銘式前に船体を塗りがえたペンキ職は嶋田さんの義息の島田和彦さん、刻銘の文字も和彦さんでした。壊れた個所の補修は木場の大工職・山口秀夫さん、息子山口秀和さんや加藤正太郎さんが中心でした。展示館完成時の展示や装飾は建具職の若宮賢さん、石原由雄さん、インテリアの田中浩さんでした。

現在の企画展などの高所展示や収納庫づくりを担ってくださるのには山口秀夫さんの孫の山口雄三さん岡山勝大さん、大工のご兄弟です。

先の写真に写る割烹着姿は三井さんが書記長だった東京建設従業員組合の「主婦の会」

のお母さんでしょうか。主婦の会のみなさんは、各種の集いや凧揚げ大会などで甘酒を準備してくれるなど参加者をもてなしてくれたのでした。

夢の島の番小屋を訪ねるといつも嶋田さんがお茶を淹れてくれました。仕事にかまけてお話を聞く機会を持ちませんでした。沢山のことを聞いておくべきでした。筏乗のことと木場の移転のこと、そして戦争、三月一〇日のことも。

嶋田さんは展示館開館後数年、館の清掃の仕事に就かれました。

*

「第五福竜丸みんなの船」こう書いた凧を長女にもたせて凧上げ大会に参加したのは、四三年前でした。私は小学校入学前、下谷の叔母の家で育ったこともあり、下町に郷愁があるのです。鬼灯市や朝顔市、富岡八幡の深川祭りなどに連れていかれました。夢の島は東京江東の辰巳の海、しののめの空。嶋田さんの思いを背に「晴れた日に雨の日」の連載を終わることにします。(やまむら しげ お／平和協会顧問)

一通の手紙から

市田 真理

入院中の第五福竜丸乗組員
たちへ、昏睡状態の久保山
愛吉さんへ、遺族へ……
当時全国からたくさんの方
まし、お見舞いの手紙が届
けられました。その一通。



一〇〇年先も航海を……

大石又七さん語る

写真：河田透



展示館を見学する大学が増
えています。レポート課題の
ほか、ゼミの授業をする大学
もあり、協会所蔵資料の活用
なども呼びかけています。

二月一〇日、立教大学の
フィールド実習「ビキニ事件
を歩く、見る、考える」の一環
で、第五福竜丸元乗組員・大
石又七さんのお話を聞く会が
開催され、学生たちが大石さ
んにインタビューしました。

学生インタビューから

「水爆実験で被ばくした翌年

沖繩・石垣島からの手紙が
あります。久保山愛吉さんの
妻・すずさん宛て。手紙の末
尾には一九五四年一月五日
日と記されていますが、封筒
の切手が切り抜かれているた
め消印はわかりません。差出
は「琉球八重山郡大浜町」と
なっています。当時は米統治
下でした。

「戦場と化した琉球住民と
してみれば、単なる爆弾や砲
弾等だけでもあんな惨めな結

一九五五年に退院してから
は、故郷に帰ったものの、偏
見や差別の視線に耐えきれず
東京に逃げ出し、沈黙し続け
た。しかし第五福竜丸が夢の
島で「発見」された頃から、
当事者として核兵器の恐ろし
さを語れなければと思うよう
になり、メディアの取材に応
じるようになった。」と語り
始めた大石さん。学生から「マ
グロ漁の大変さややりがい
は？」と問われ、「板子一枚
下は地獄と言われるが、敗戦
後の荒れた時代に、まさに地
獄で働くようなありさまだっ
た。その時代を共にした仲間
たちが亡くなっていくなかで

果を生んだのに、それに勝る
原子爆弾、水素爆弾の威力を
新聞雑誌等で見ただけでも、
今後の戦争の残酷さが偲ばれ
て、悲しい思いでいっぱいに
なったのであります。戦争の
犠牲となつて山野に骨をさら
している同胞の悲惨な姿を目
のあたりに見えては、たとえよ
うのない悲しい涙に明け暮れ
たのであります。」と沖繩戦
の記憶を綴っています。

二〇〇四年、琉球新報が送

自分は現在も生きている。こ
れは事件のことをしっかり伝
えるということなのだと思っ
ている」と話します。また「語
り続けることについて、家族
は反対しましたか？」という
問いには「最初は猛反対だっ
たが、その壁を乗り越えな
いと書くことも話すこともでき
ないと思った。子どもの結婚
や商売にも不利になると言わ
れたこともあるが、それでも
ある時期から理解してくれる
ようになり、いまでは協力し
てくれている」と話しました。
事件を知らない人たちに、こ
れから先も、語り続けてほし
いと、学生を激励しました。

り主を捜したところ、ご本人
はすでに鬼籍に入られていま
したが、子息から「父は沖繩
戦時は警察官で、避難民を誘
導する途中、数多くの遺体が
転がる痛ましい光景をよく話
していた。戦争の悲惨さを歌
った短歌も作っていた」との
ことです（九月二四日付）。

当時、すずさんの元へは、
支払われた見舞金をめぐり羨
望・嫉妬の声や、世界母親大
会への出席が取りざたされた
ことで「一介の主婦が調子に
のるな」などの脅迫まがいの
手紙も送られており、そうし
た報道が沖繩へも届いていた
のです。「他人の悲しみを共
に悲しむことのできる人間で
あるはずなのに、その人情が
冷たくなった人類社会がいや
になつて参りました。すず様
泣かないでください。誰がな
んといおうと強く生きてくだ
さい。」と、愛吉さん不在で
迎える久保山家のお正月に思
いを馳せて励ましているのだ
した。

(いちだまり 学芸員)

*「一通の手紙から」では協会
所蔵の三〇〇〇通の手紙を紹介
していきます。

静岡大学で福竜丸展



静岡大学キャンパス・ミュージアムで、11月12日から25日まで企画展「第五福竜丸と静岡大学」が開催されました（主催、同大ミュージアム）。

焼津港に第五福竜丸が帰港し、3月16日の新聞報道で被ばく事件が報じられ、県の依頼で最初に駆け付けたのが静岡大学理学部の塩川孝信教授でした。焼津市役所で乗組員の検査をし、高い放射線量が検出されて、つづいて船体に向かうと30メートルも手前からガイガーカウンターが鳴ったといっています。当時測定器が1台しかなく、とにかく汚染の広がりを防ぐために努力した、と当時を回想しています（「福竜丸だより」87年3月号）。

この時採取され分析された「死の灰」はのちに展示館に寄贈され貴重な所蔵資料として展示されています。

今回の企画展には、展示館から第五福竜丸のパネル42枚と大漁旗（レブリカ）、船体写真のタペストリー、「死の灰」、ガイガーカウンターなどが貸しだされました。

会場には、当時の「静岡大学新聞」での第五福竜丸被災の報道などの記事も展示され、11月20日には、「戦後の水爆実験と第五福竜丸被ばく」と題して安田和也事務局長が講演、協会の山本義彦理事（静岡名誉教授）も参加しました。

触察ワークショップ

昨年に続き、真下弥生さんが主宰する「触察ワークショップ」が11月26日に行われ、見えない人、見えにくい人、見える人など7人が参加しました。まず錨や船体に触れながら歩測で船の大きさを観察します。その後、大石又七さんが製作した第五福竜丸の模型、ビン玉、サンゴのかけら、アミノモノ（マーシャル諸島の手工芸品）などに触れながら、参加者の質問に学芸員が答える形で進められました。船の部位や漁具の使い方、大きさなど質問は多岐にわたり、わからないことを一緒に考えたり、他の人の感じ方に感心したりと、終始にぎやかでした。

参加者からは船の高さを知るために音を使ってはどうか、音声ガイドをつ



けるならば複数で聴けるようにする方が便利などの提案が多数出され、ウェブサイトの利用についても、テキストの読み上げ機能が使えれば事前に情報収集ができる、など具体的な指摘も受けました。ユニバーサルな展示について、見える人も見えない人も共に考えるワークショップとなりました。

船体等保存委員会 ひらかれる

建造70年をむかえる第五福竜丸船体の状態を調査し現状と今後の課題を提起する検討委員会の初めての会合が12月19日に開かれました。

委員会は第五福竜丸平和協会のもと、木造文化財修復の専門家で協会評議員の日塔和彦さんを座長に、海洋大学名誉教授の庄司邦昭さん（造船学）、東京文化財研究所の中山俊介さん（船舶工学）つくば大学教授・松井敏也さん（世界遺産修復）、古川洋さん（建築構造）により構成されています。

委員会は、エンジンの状態についても検討し、約1年をめどに報告をまとめる予定です。

市民講座 3・1ビキニ記念のつどい2017

フランス核実験、被害者はいま ——汚された太平洋の楽園——

核保有数3位の国フランスは、南半球の仏領ポリネシアの2つの環礁で200回余の核実験をおこないながら、被害や環境汚染を否定し、反対運動や被害者の声を無視してきた。しかし近年被ばく者たちが声を上げ変化の兆しがある。仏核実験の実相と今を学ぶ。

*日時 2017年2月25日（土）午後2時—4時30分

*会場 夢の島公園・BumB 東京スポーツ文化館（新木場駅徒歩12分）

*報告 真下俊樹（フランス核政策研究者、埼玉大学講師）

豊崎博光（フォト・ジャーナリスト、第五福竜丸平和協会専門委員）

*資料代 500円